

# 国語科学習指導案

指導者 浜岡恵子

**日時** 平成25年11月30日（土） 第3校時（13：15～14：05）  
**年組** 中学校第3学年1組 計39名（男子19名，女子20名）  
**場所** 中学校第3学年1組教室  
**単元** 「漢和辞典でひらく漢文の世界」

## 単元について

今年度、本校国語科では、言葉の学習としての「漢字」と伝統的な言語文化としての「漢文」の学習を関連づけ、「漢字文化」として小中の学びがつながる授業の提案を試みる。

漢文とは、一般的に古代中国の文語文のことを指す。漢文の特徴として挙げられるのは、簡潔さとリズムの美しさである。原文のまま中国語で読む時はもちろん、訓読文にかえて日本語で読む時も、和語で綴られた古文とは異なる趣を味わうことができる。漢文にもさまざまなジャンルがあるが、簡潔さとリズムの美しさが凝縮されているという点で、漢詩は大変優れている。その中でも、今回の教材として取り上げる中国唐代にできた新しい詩（唐詩）は、李白、杜甫といった詩人に代表され、日本でもなじみ深い詩が多い。唐詩が、特に読み継がれてきたのは、「句数・字数・構成・対句・押韻などの制約を設けることによって、緊密な構成と音律的な美しさを意識的に作り出そうと腐心した」（大上，2013）というように、形式、内容ともに完成度が高いからである。その分、詩の背景をしっかりと押さえれば、中学生にも理解することは十分可能であると言える。それらの中でも、今回の授業で扱う王翰「涼州詞」と王之涣「登鶴鵲樓」、李白「送友人」は、中国ならではの風景と心情の表現が秀逸である。「山」「川」などは自然物の雄大さ、「万里」「沙場」などは中国の大地の広大さを想像させるとともに、人間の小ささ、頼りなさとの比較が絶妙である。絶句の限られた文字の中に、これだけの振り幅の大きな表現が凝縮されているのは、和歌とは異なる魅力であろう。しかし同時に、作者の心情においては、時間と空間を越えて現代の私たちにも理解できる共通の感性があることを思い起こさせる内容となっている。

本校第3学年の生徒は、第1学年で「故事成語」、第2学年で「漢詩」を既に学習している。内容の読解に加えて、「返り点」や「送り仮名」といった訓読のきまりもその際に指導し、漢文を正確に朗読することをめざした。しかし、読解には、書き下し文や現代語訳を利用し、一語一語の漢字そのものの意味やはたらきに目を向けさせる指導には至らなかった。その結果、「訓読のきまりに従って書き下し文にすること」には半数以上の生徒が自信をもっているが、「漢文を読んで内容を理解すること」に自信があると答えた生徒は30%程度にとどまる結果となった。また、漢字の意味やはたらきを知るため活用する漢和辞典については、「漢和辞典の引き方」を1学年時に指導しているが、その後の活用については個人に委ねるのが現状である。最近では、中・高生から電子辞書を使用することが多くなり、せっかく学習したことが、生徒の日常にはほとんど必要とされていない状況も懸念される。電子辞書は、辞書複数分という圧倒的な情報量がありながら、簡単な操作で調べられることに加えて、携行しやすい点で利便性が高い。本校にも、電子辞書を身近に置いて分からないことをすぐに調べている姿が授業中にしばしば見られる。大変良いことであると感じる。しかし、漢和辞典に限って言えば、漢字の書き方や読み方を調べる漢字辞典としての限定的な機能しか使用していない実態がある。漢字学習については、対象生徒の46.8%が好意性を示し、実に93.7%が重要性を認識しているが、漢文学習について好意性を示した生徒は24.1%、また重要性についても41.8%と低い結果となった。漢字学習と漢文学習は「漢字」という共通性を持ちながら、

単元としての扱いは、生徒にとっても教師にとっても切り離れた感があることを否めない。

そこで今年度、漢文（漢詩）を「漢字文化」の学習の中に位置づけ、言葉（＝漢字）そのものに目を向けた指導を行う。指導の具体的な方法として、まず、漢字の意味や熟語の構成、漢文訓読のきまりについて指導する。この段階で、日常用いている漢字について、日本語を表現するだけではなく、漢語としてとらえ直すための新たな視点をもたせる。日本語の中に定着している漢語は非常に多いが、和語と漢語の共通点や相違点を再認識することが、生活知と科学知ののぼりおりとなり、漢文特有の性質を理解することにつながると考える。今回の学習では、漢詩を訓読すること、作者が描く場面・風景を読み取ること、作者の心情に思いを馳せることの三つの面から漢詩に迫るための活動を設定する。その際、漢和辞典の用例や同訓異義要覧を活用させながら、なぜその言葉（＝漢字）が用いられているのかという理由を考えさせる。一語ずつの言葉（＝漢字）が、どのような意味と役割をもって、そこに存在するのかを考えることは、漢詩全体の読解にも有効にはたらくと考えたからである。電子辞書は大変便利な学習機器として、これからも活用の機会が増えていくことだろう。しかし、今あえて紙媒体の漢和辞典を活用することで、一語一語の漢字とゆっくりと向き合わせ、生徒のもつ漢字文化の世界を広げていくことを試みたい。

### 指導目標

1. 表意文字としての漢字の特性（音訓の読み、意味、はたらき）を漢和辞典を活用しながら改めて学び、漢文の読解に役立てることができるようにする。
2. 漢和辞典を活用して漢詩の情景を読み取り、詩の表現する世界を味わうことができるようにする。

### 指導計画

1. 熟語の構成、漢文訓読のきまり、漢和辞典の使い方を学ぼう…………… 2時間
2. 「漢詩」を読み味わおう…………… 3時間（本時はその2時間目）
3. 自分の思いを漢詩で表現し、交流する…………… 2時間

### 本時の目標

漢和辞典を活用し、漢詩の言葉の意味を探ることで、詩の情景を深く読みとることができる。

### 「学びのつながり」の視点

漢字は、生徒自身の「読むこと」「書くこと」を支える基本的な言語事項として、小学校1年生から学習する。中学3年義務教育終了時には、学年別配当表記載の1006字に加えて常用漢字のすべてについて、読んだり文章の中で使い慣れることが求められている。また、伝統的な言語文化については、昔話や文語調の詩歌を「話すこと・聞くこと」から始まり、歴史的な背景なども踏まえながら作品世界に親しむことや現代とのつながりを認識させることをめざしている。Ⅰ期～Ⅲ期の発達段階に応じた学習の中で、漢字を「言語」と「文化」の両面を扱い関連づけていくが、特にⅢ期の学習では、既に獲得した言語知識や技能という「生活知」を根拠として、漢詩を読む過程で獲得していく「科学知」とののぼりおりを設定する。生徒が、詩の言葉に表現されたもの（＝目に見えるもの）から詩の言外に表現されたもの（＝目に見えない意味や情感）に気づき味わうことで作品を読み深められるような取り組みにしたい。

## 学習の展開

学習内容	学習活動	指導上の留意点 (◆評価)
<p>1. 導入 (5分)</p> <p>目標の把握と準備</p>	<p>□前時までの学習を想起し、本時の学習目標と学習方法を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>王之涣「登鶴鵲楼」について、詩の情景を読み解こう</p> </div>	<p>○ゴールの姿 (=詩の情景を読み解く) の具体を生徒と共有しておく。</p> <p>○これまで学習したこと (漢語の構成、漢詩の形式ときまり) を活かして考えていくよう促す。</p>
<p>2. 展開 (35分)</p> <p>詩の全体を把握する</p> <p>詩の言葉に着目し、読み深める</p>	<p>□本時に学習する作品を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・王之涣「登鶴鵲楼」の詩と、外観や所在地を示した資料を見る。</li> </ul> <p>□作品の場面を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どこで、誰が、何をしている (またはしようとしている) のか、について詩の言葉を手がかりに考える。</li> <li>・詩の構成についても確認する。</li> </ul> <p>□承句の空欄 (黄河) に入る言葉を考える。</p> <p>□結句の空欄 (上) に入る言葉を考える。</p> <p>□グループで選んだ課題に取り組み、明らかにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>A : 詩を訓読しよう</li> <li>B : 作者が見た景色を描こう</li> <li>C : 作者の思いに迫ろう</li> </ul>	<p>○王之涣「登鶴鵲楼」を生徒に示すが、一部空欄にしておく。(電子黒板、ワークシート)</p> <p>○「鶴鵲楼」の現在の写真と所在地がわかる地図を示す。</p> <p>○詩の場面をおおまかに把握できれば良いが、どの言葉からそれが分かるのかということは必ず押さえる。</p> <p>起・承句…景 (白日, 山, 海…)</p> <p>転句…情 (欲, 窮)</p> <p>結句…情 (更, 一層…) ←ここでは、景と考えても良い。</p> <p>○思いつかない場合は、起句と承句が風景を表現していること、対句になっていることに気づかせる。</p> <p>○それでも出てこない場合は、先に示した地図をもう一度見るよう促す。</p> <p>○「黄河」がわかった場合も、地図を用いて鶴鵲楼からの眺めを想像させる。</p> <p>○4人グループを作り、話し合いやすいよう机を移動させる。</p> <p>○課題を3つ用意し、10グループそれぞれに課題を選ばせる。課題の選び方に多少の偏りがあっても良いことにする。</p> <p>○課題A : 訓読に関するもの</p>

<p>3. 終結 (10分) 本時のまとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・漢和辞典を用いて、根拠がきちんとと言えるようグループで検討する。</li>   <li>□課題について明らかになったことを説明する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>A：意味、用法を考えながら、詩を訓読する。</li> <li>B：鶴鶴楼からの夕暮れ時の眺めと黄河の流れの先にある海を意識した景色を表現する。</li> <li>C：さらに高みを求める作者の思いが、実際の景色に対するものだけではないことに気づく。</li> </ul> </li>   <li>□今回取り上げた漢詩について、交流（グループ、全体）によって理解が深まった点について確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>*熟語の構成、対句表現に注意しながら訓読できるようにする。</li> <li>課題B：景を読み解くもの <ul style="list-style-type: none"> <li>*眼前に見える景色（山，黄河）と、さらにその向こうにあるを海にまで作者が思いを馳せていることが描けるようにする。</li> <li>*ここで言う「白日」とは何か考えて、描き入れるようにさせる。</li> </ul> </li> <li>課題C：情を読み解くもの <ul style="list-style-type: none"> <li>*結句の「上」と題名の「登」は、どう違うのか考えさせる。</li> <li>*「更上一層楼」とは、何をめざしたのか考えさせる。</li> </ul> </li> <li>○*印の部分を書いた学習の手引きを配布し、考える時の手がかりにさせる。</li>   <li>◆漢字の意味やはたらきを吟味し、根拠に基づいて課題を明らかにすることができたか。【読むこと】</li>   <li>○本時の学習で得たことは何か整理し、生徒自身の言葉で再構築させ、本時の学習についての意味づけを行う。</li> </ul>
-------------------------------	---	---

【参考文献】 文部科学省『中学校学習指導要領解説 国語編』. 教育出版  
大上正美『唐詩の抒情』. 朝倉書店